

Title	日中戦争期の重慶における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴： 中国回教救国協会とその重慶市分会を中心にして
Sub Title	On the Characteristics of Religious Activities Observed in the Chinese Islam Association for National Salvation in Chongqing during the Sino-Japanese War
Author	矢久保, 典良(Yakubo, Noriyoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2010
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.79, No.1/2 (2010. 3) ,p.55- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20100300-0055">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20100300-0055</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日中戦争期の重慶における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴

——中国回教救国協会とその重慶市分会を中心にして——

矢久保 典良

はじめに

中国のムスリムは、圧倒的多数を占める漢族に囲まれて生活しているという意味においてマイノリティであるが、その数自体は決して少なくない。国民国家の形成をめざす中、国民政府は国民を統合するために国内の他の集団と同様に、ムスリムをも取り込んでいかなばならなかった。特に日中戦争期は戦争遂行の目的からも、ムスリムを「国民」に組み入れる必要があった。日本もまたムスリムに積極的に働きかけて自陣営へ入れることを狙っていたことから、これに対抗しなければならなかった。それは日本側が積極的にイスラーム工作を行っていたことによる脅威からきていた。

満洲事変後、新たに成立された「満洲国」内のムスリ

ムに対して日本は工作を行うため、一九三四年に満洲伊  
斯蘭教協会を設立した（一九三六年に満洲回教協会に改  
組）。次に「満洲国」に隣接する内モンゴルに「蒙疆政  
権」を樹立すると、そこに西北回教聯合会を設立した。  
西北地方（寧夏、甘肅、青海、新疆、陝西の各省）は回  
民軍閥と呼ばれるムスリムの世俗軍事勢力が支配してお  
り、国民政府の支配があまり及んでいなかった。信仰に  
基づく強い絆によって生み出されたムスリムの団結心、  
それに基づいて張りめぐらされるイスラーム・ネットワ  
ークを政治的・軍事的に自陣へ取り込むとともに、ソ連  
から中国へと続く中国側の補給路、いわゆる「西北ルー  
ト」を断つことが日本の目論みであった。<sup>1</sup>さらに一九三  
八年には華北地域にもムスリムを懐柔するため、中国回  
教総聯合会を設立した。

こうした動きに危機感を抱いた国民政府側もムスリムに働きかけを行っていた。特に中国回教救国協会（以下「協会」と略称する）が重要な役割を果たした。実際、「協会」とは国民政府系のムスリム指導者らによって設立された全国規模（実際には国民政府の支配地域）で中国ムスリムの統合を試みるための組織・団体であった。

「協会」は白崇禧ら国民政府関係者のムスリムによって指導されていたため、「国民政府の擁護、三民主義に適應した行動の促進、イスラームの発揚、ムスリム同胞の団結、抗戦建国に対する協力」という宗旨を掲げているように、国民政府の意向を代弁してのムスリム向けの宣伝工作と、イスラームに基づく団体であることによる宗教の発揚を担っていた。<sup>(2)</sup>「協会」の前身は白崇禧が蒋介石によるムスリムの有力者を集めて会議を開くようにという指示を受けて、武漢でムスリムの有力者と話し合った結果、一九三八年五月に武漢で成立し、同年八月に重慶へ遷った「中国回民救国協会」であった。<sup>(3)</sup>一九三九年一〇月には漢語を日常に用いるムスリムである回民だけでなく、トルコ系諸語を使用するムスリムをも含む中国の全ムスリムの統一組織を目指していたという理由から「中国回教救国協会」へと改組された。それは中国回民

救国協会という名称の中の「回民」という二字が「回教人民」の省略であるというような所謂「回教徒の人民」を指すのか、「回教民族」の省略であるというような民族の意味を含むものを指すのが明瞭ではなく、両者を混同させてしまう恐れがあり、中国のムスリムの組織・団体の名称として「中国回民救国協会」より「中国回教救国協会」の方がふさわしいと、白崇禧らムスリム指導者が見なしたことによる。<sup>(4)</sup>日中戦争以前から各地で様々なムスリム組織・団体が設立されていたが、あまり機能せず分散して存在していた。そこで、国民政府の指導下で一つにまとめあげられていくことになった。

以上の「協会」の成立の背景には日中戦争のための「抗日」の必要性と国家を超えたムスリムの団結の必要性があった。結成目的はムスリムを組織化することであった。それは全国のムスリムを包括する団体の成立を希求する動きと連動したものであった。「協会」には国民政府の意に沿った活動を行うことによって、中国において絶対的多数の漢族の中でマイノリティとして生きなければならなかったムスリムの生存の術としての政府側への団体側からのすりよりの面も合わせ持っている。そこには清末の反乱以来形成されたムスリムに対する負

のイメージが彼らの生活に影を落とし、これらの記憶が未だに残り、様々な漢回対立の火種になりうることもあり、抑圧されているとか蔑視されているとかといった漠然とした意識があったからである。

本稿ではこのような事実をふまえて「協会」とその一分会を中心に中国ムスリム団体の宗教活動における政治要素を分析し、その政治利用のあり方を明らかにしたいと思う。

日中戦争期のムスリム、特に回民やその団体を扱った研究は多いが、そのほとんどは彼らの「抗日活動」における政治的な役割に着目している。また中国における研究の多くは、とりわけ彼らの「救国」・「愛国」的な面を重視している。<sup>(6)</sup>しかし、日中戦争期の中国ムスリムおよび「協会」の宗教活動を扱った研究はほとんどない。戦時下のムスリムの国民政府への取り込みの問題を直接的な政治利用の側面からではなく、元来ムスリムが有する宗教に基づく規範意識の利用という面からも見ていくこともまた必要と思われる。日中戦争下におけるムスリムの取り込みにおいては「愛国」、「抗日」、「救国」等といったスローガンを前面に押し出した政治的プロパガンダによるものだけでなく、ムスリムが信仰する

イスラームという宗教的要素も政治利用されたと見てよい。それゆえ、戦時下における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴に注目することはまた重要であると思われる。中国における信仰や儀礼の政治利用に関する研究には、伝統王朝による祭天儀礼に対するものや共産党による民俗や民間信仰に対するものがある。<sup>(7)</sup>しかし、従来の研究では中国においてイスラームの宗教儀礼を政治利用した活動の分析はほとんどない。

### 一、日中戦争期の重慶と中国ムスリム

まず日中戦争期の重慶の状況を概観しておこう。日中の全面戦争が勃発し、南京が陥落すると、国民政府の政府機関や文化機関は四川、雲南、広西、貴州などといった内地へ次々と移転していった。<sup>(8)</sup>その中でも重慶は、特に重要な場所であった。一九四〇年九月六日に国民政府が中華民国の臨時首都を重慶に置き、日中戦争期の中央政府の所在地となったため、「抗戦」の中心としての役割を担うことになったからである。<sup>(9)</sup>

戦時下のこの街は経済の急成長が見られた。それは戦火を避けた難民の流入による人口増加と工場の到来によるものだった。内地に移転した工場の約半数近くが重慶

に集中し、その八割近くが重化学工業関係の工場であった。国民政府は抗戦体制の維持強化のために積極的な経済発展政策をとり、工業化をはかろうとしていた。<sup>10)</sup> 日中戦争を要因とする政治・軍事・文化に関する諸機関とヒト・モノの大移動による集中が生じた結果、この時期の重慶は急速に発展していった。<sup>11)</sup>

次に戦時下の重慶のムスリムについて見ていく。一九三九年当時の重慶市区のムスリムの状況は「戸数が約二百戸、人口数約千人で主な生計は商業であった」と描かれている。<sup>12)</sup> 当時の統計がどこまで実人数を示しているかは考慮する必要があるが、この数は中国国内でムスリムの多く居住している西北地方や雲南に比べてはるかに少ない。しかし、前述したように重慶は戦時下の臨時首都となり、それに伴って政府機関や文化機関が各地から移転してきた場所であった。特に一九三七年に日中全面戦争が勃発し、ムスリムが比較的多く居住している華北が日本に占領されると、次々と内陸へ移動したことに伴って、政治家、軍人、文化人など多くのムスリムの有力者や団体が戦火を避けてこの地に避難してきた。こうした状況下で、国民政府に近い立場をとっていたムスリムたちによって指導され、日中戦争下で中国ムスリムを統

合・組織化し、全国規模の社会团体・政治団体となることを目指していた中国回教協会も武漢よりこの地に遷ってきたため、「重慶は全国回教機関の中核に変化した」と見なされるようになった。<sup>13)</sup> かくして重慶は一時中国のイスラームにおける中心になったといえるのである。<sup>14)</sup>

## 二、重慶のムスリム団体と清真寺

### (一) 重慶ムスリム団体の系譜

〈協会〉が成立する以前の重慶には、「教育を振興し、団体を固めて、漢回の親睦を図る」ことを宗旨として掲げていた全国規模のムスリム団体であった中国回教俱進会の支部が存在していた。<sup>15)</sup> これは一九二六年に中国回教俱進会四川分会の命令によって組織されたもので、重慶西寺、南寺、北寺の郷老（清代及び民国期の清真寺の管理者）がこの支部を指導していた。<sup>16)</sup> 支部内には執行委員と監察委員がそれぞれ一〇名いて、支部の会長は設立当初より温鶴汀という人物が務めていたが、彼が死去した一九三四年以後、会長のポストは空席となり、組織の活動は衰退していった。<sup>17)</sup>

一九三八年八月、中国回教俱進会重慶支部が機能しなくなっていたところに中国回教協会が重慶に遷って

きて、この地で「中国回教救国協会」へと改組した。理事長は国民政府軍事委員会副参謀総長等の要職に就いていた軍人・政治家の白崇禧であり、実務は唐柯三ら成達師範学校関係者が担っていた。<sup>(18)</sup>〈協会〉の総会（本部）の所在地は重慶張家花園六二号であった（のちに中興路へ移転した<sup>(19)</sup>）。重慶には総会の他にその下部組織であった重慶市分会もあった。これは重慶市のムスリムを組織することを目的とし、一九三八年一月に設立されたものである。<sup>(20)</sup>この宗旨は「回教を発揚すること、ムスリム同胞を團結させること、抗戦建国に協力すること」であった。<sup>(21)</sup>総会と分会との関係は前者が後者を指導し、後者は前者に活動状況を報告する義務を有するものであった。<sup>(22)</sup>

この他に、重慶には中国伊斯蘭青年会（一九四五年一月に「中国回民青年会」と改称）と中国回教文化研究会があった。前者は〈協会〉傘下の社会団体であり、一九四〇年二月一日に成立した。設立された当初は固定された所在地が決まっていなかったが、一九四三年に総会の旧所在地（張家花園六二号）に定まった。当初会員数は一〇〇人程度であったが、一九四四年には三〇〇〇人ほどに拡大した。後者は一九三九年三月に〈協会〉副理事長唐柯三と常務理事馬宗融の提案によって、その指

導下で設立された学術団体であり、イスラームの教義の紹介や学術研究を旨としていた。この団体にはムスリムだけでなく郭沫若や顧頡剛といった非ムスリムの文化人・知識人も会員となっていた。<sup>(23)</sup>

以上、重慶におけるムスリム団体について概観してきたが、日中戦争当時最も重要な役割を果たしたのは、やはり〈協会〉の総会とその重慶市分会であった。これらは日中戦争期に全国規模でムスリムを統合し動員と組織化を試みた団体であったからである。

## （二）中国回教救国協会と清真寺

〈協会〉の重慶市分会の所在地は重慶十八梯清真寺にあった。「清真寺が教務遂行の中心」<sup>(24)</sup>であると〈協会〉が見なしていたように、清真寺、すなわちマスジド（モスク）はムスリムにとって心の拠り所であり信仰を實踐する場であった。清真寺の教義上の儀式や行事を掌り、かつムスリム集団の社会秩序と個人の生活規範の維持を監督・指導するなどといった宗教上の職務を司っていたのは宗務者としての教長であった。元来、清真寺の管理運営を担っていたのは郷老と呼ばれる人たちであった。郷老の職務は月費の徴収、献金の募集、宗務者の俸給の

支払い、清真寺の維持修理など財政会計に関する事項の処理や教長の招聘・罷免等であった。そのうち最も重要なものは教長の招聘であった。これは郷老が該当する清真寺の信徒の名で行うというように形式的には信徒の総意の形をとっていたが、実質的には郷老の意向によって決められた。郷老は選挙によって複数人選ばれ、通常任期は一年で断食明けの祭りに改選され、重任も妨げなかった。この郷老の中から主席者あるいは幹事が選ばれ、日常の事務処理を委ねられた<sup>(25)</sup>。一般に清真寺は郷老によって管理運営されていたといつてよい。

では、〈協会〉成立後の清真寺はどのように管理運営されていたのか。〈協会〉による清真寺董事会に関する規定と清真寺の管理に関する規定では、〈協会〉と清真寺との関係を以下のように定めていた。<sup>(26)</sup> 清真寺董事会は選出された三人から七人の董事によって組織され、彼らが職務を担い、必要時に董事の中から互選で常務董事三人を選ぶことができた。董事の候補資格は、当該のムスリム居住地区に五年以上居住し、教律を守り公正誠実であることが公認される者、一年以内に当該の居住区内の清真寺あるいは学校に国幣三〇〇元以上を寄付した者、教務・教育及び地方公益に熱心であると公認される者、

当該のムスリム居住区域の清真寺あるいは回民学校の創立に関して歴史があり特別な関係がある者であった。選出された董事たちによって構成された董事会が清真寺の事務、会計、審議等を管理した。具体的には、教長の招聘・解任、寺産の購入・売却、清真寺の経費の預金や貸出の管理と募集、各種事務の新設と改良などであった。董事会は毎月一回会議を開き、会議の主席は董事会の構成員による輪番制であった。董事の選出・改選は断食明けの祭りに際に協会の分会（省市レベル）・支会（県市レベル）が派遣した監督者のもとで実施された。董事会の組織状況については分会・支会に報告する義務を負った。経費の出納に関しては掲示して公開した上で分会・支会・区会（郷鎮レベル）に報告しなければならなかった。他方、〈協会〉は自ら制定した「清真寺管理辦法」を用いて全国の清真寺の管理や運営を行おうとした。そのため、分会や支会も「中国回教救国協会章程」や「清真寺管理辦法」を管轄区の清真寺に対し一律に遵守させねばならなかった。清真寺に人事上の問題が生じた際には各地の分会や支会が処理に当たり、それでも解決できないような重大案件の場合は総会が処理を担当した。各寺は収支を半年ごとに分会へ報告する義務を負った。各

寺は寺産の利用による教育及び公益事業を実施することができたが、その進行状況・収支状況を翌年一ヶ月以内に「協会」へ報告する必要があった。また「協会」は人員を派遣して、各寺の管理状況を視察した。各分支部は清真寺の名称・所在地等の情報をリスト化して「協会」へ送付しなければならなかった。

清真寺董事会は清真寺を管理して、「協会」の下部組織である現地の分会や支会が董事会を監督・指導した。清真寺は「協会」によって間接的に管理されていたのである。中国ムスリムの特徴の一つとして「大分散小集住」と言われるように、中国全土に分散し、それぞれの地域で清真寺を核にその周辺に集住して生活していた。それぞれの地域で清真寺はムスリムコミュニティの中心に位置していた。<sup>(27)</sup>そのため、「協会」は清真寺を管理することを通して、その地域のムスリムを把握・管理し、彼らの統合を試みていた。

以下、「協会」の機関誌『中国回教救国協会会刊』などをを用いて、具体的に重慶の清真寺について見ていく。<sup>(28)</sup>実際、重慶には西寺、南寺、北寺の三座の清真寺があった。西寺は十八梯という場所にあったので、重慶十八梯清真寺とも呼ばれていた。ここは明代万暦年間（一五七

三―一六二〇）に馬文昇よって「重慶清真寺」として建立されたといわれるが、後に南寺が成立したため清真寺と称されるようになった。日中戦争期には陪都清真寺となり、戦後は中興路清真寺と呼ばれるようになった。ここは前述のように「協会」の重慶市分会の所在地であった。南寺は清代康熙年間（一六六一―一七七二）に馬

化蛟・韓大考よって建立された。北寺は一九一四年に張星亭が提唱した募金よって建立された。ただし、北寺は江北城内にあったため、重慶市区内にあったのは西南両寺であった。三寺を比較すると、信徒の人口やアホン（宗務者）数は西寺、南寺、北寺の順であったが、収入面においては南寺が西寺を上まわっていた。これは南寺が比較的裕福であった江南からの移住者よって建立された寺院であったからといえる。

日中戦争中、重慶の清真寺は日本軍の爆撃にあい、破壊と修復とを繰り返した。例えば、一九四〇年西南両寺はともに被災した。その時、「協会」の実務担当者の一入であった王夢揚<sup>(29)</sup>は西寺董事会や重慶市分会の責任者と相談した。そこで、「重慶数百戸の回民にとつて清真寺は必要である」や「全市回民にとつて礼拜寺は集会の中心である」といった意見が出され、西寺は修理されるこ



とになった。修建費は六〇〇〇元を要し、その半分を「協会」が負担し、残りの半分を董事会が用意した。一九四一年七月八日に西寺は再び被災し全壊した。「重慶市のムスリムにとつて清真寺は必要であり、齋月に臨むうえて需要がある」というように、この時は断食月が近かつたため、「協会」は修建費二〇〇〇元を補助し、最短期間で礼拝殿及び水房の工程を完成させた。西南両寺は元々別々に管理されていたが、再び両寺が共に被災したため、一九四三年に「協会」の支持下で西寺所在地に両寺は統一され、陪都清真寺として再建された。その際、「協会」を設けた。再建にかかる費用は六〇万元に及び、その半分は政府が補助し、残り半分は「協会」による募金で賄った。<sup>(32)</sup>「協会」が清真寺の再建に対して資金面で積極的に関与していたことは明らかである。重慶の清真寺は協会が移転してくる以前から存在していたが、日中戦争下で度重なる日本軍の空爆によって破壊され機能していなかったため、外部から多数の有力者や知識人が流入してきたことも関係し、「協会」が資金援助をすることによって清真寺を再編して管理しやすくし、利用できるようにしたと考えられる。

### 三、重慶における宗教活動

#### (一) イスラームにおける祭り

イスラーム世界で行われる祭りにはイードとマウリドがある。イードとは断食や巡礼などの五行と密接な関わりを持つものであり、イスラーム法に規定されている正統な祭りである。<sup>(33)</sup>祭りには断食明け祭り(イード・アル・フイトル)と犠牲祭(イード・アル・アドハ)とがある。両イードに共通する儀礼は「イード礼拝」である。街区や村の共同体の成員は当日の日の出後から南中までの間にそろって礼拝用広場や大モスクに集まり、集団礼拝の後にイマーム(礼拝の導師)の説教を聴く。彼らはその後新しい服を身にまとい、親族・隣人・友人などと挨拶や談笑を交わして祝日を過ごす。一部には墓参もあり、夜には結婚式が行われることもある。他方、マウリドとは時代や地域によってかなりの相違が見られるが、預言者や聖者といった崇敬されるべきムスリムの誕生日や命日を祝って挙行される祭りである。イスラーム法に規定はなくファアティマ朝に始まる祝祭色の濃い行事であったが、イスラーム世界各地で行われてきたもので、厳格主義者の間ではマウリドを異端視する見解も存

在する。それゆえイスラームの宗教活動としての祭りはその正統行事と見なされているイードであったと考えられる。そこでイードを宗教活動の事例として扱う。

断食明けの祭り、すなわちイード・アル＝フィットルは小祭（イード・サギール）ともいわれる。漢語ではこの祭りを「開齋節」と呼んでいる。五行のうちの断食と関係が深い行事で、ヒジュラ暦第一〇月（シャウワール）初日に行われ、この間に周囲の貧者に特別な喜捨（ザカート・アル＝フィットル）を与える。

他方、犠牲祭、すなわちイード・アル＝アドハは大祭（イード・カビール）ともいわれる。漢語では「宰牲節」、「古爾邦節」、「忠孝節」などと呼んでいる。五行のうちの巡礼と関係が深い行事で、巡礼のクライマックスであるヒジュラ暦一二月（ズー・アル＝ヒτζヤ）一〇日に行われる。犠牲祭では家族ごと動物（多くは羊）を屠り、一族で食するとともに、一部の肉を貧者に施す。この供儀はイブラーヒームがアツラーの命に従って、息子を犠牲にしようとした瞬間、身代わりの犠牲獣が与えられたというクルアーンの伝承に基づいていとされる<sup>(34)</sup>。

## （二）重慶における断食明けの祭り

では、〈協会〉とイードとはどのような関係をもっていったのか。〈協会〉の総会は断食明けの祭りに際して、各省の分会に開催の日時を通知し、それを各清真寺に転送させた。これは全国のムスリムを動員して祈祷大会を実施させるためであった。〈協会〉は断食明けの祭りの典礼を主催した。会報においても断食月（齋月）、断食明け（開齋）、断食明けの祭り（開齋節）に関する記事が多く見られる<sup>(35)</sup>。ここから〈協会〉が断食明けの祭りを重視していたことが見てとれる。

以下、重慶の断食明けの祭りの事例を『中国回教救国協会会刊』、『中央日報』、『新華日報』を用いて描いていく<sup>(36)</sup>。日中戦争期の重慶では、一九三八年から一九四四年（ヒジュラ暦一三五七年からヒジュラ暦一三六三年）の間ほぼ毎年断食明けの祭りを実施し、〈協会〉の総会あるいは重慶市分会がムスリムを動員していた。そして、その主要な開催場所として十八梯清真寺を使用した。祭礼には〈協会〉幹部や一般のムスリムが参加した。儀礼を執り行っていたのは、十八梯清真寺の丁岐山ら地元の高宗教指導者と馬松亭や王静齋ら〈協会〉幹部を兼ねる高名なアホンだった。重慶で行われた断食明けの祭りの内

容は、その意義の説明や祭りにまつわる講演、礼拝における儀礼に関する講釈、クルアーンの講釈やその読誦、礼拝、〈協会〉の会務状況の報告などであった。例えばヒジュラ暦一三五八年の祭り（一九三九年一月二三日、午後九時―十一時、十八梯清真寺で開催、参加者六〇〇人余り）では、唐副理事長による断食明けの祭りの祈祷大会を挙げる意義の説明、艾宣裁による大会の順序の報告、丁岐山アホンによる礼拝儀礼の講釈、馬松亭の指導による礼拝、礼拝後の「呼徒白」（フトバ、金曜正午の集団礼拝や二大祭の礼拝に先立ってなされる説教）時に、馬松亭による断食明けの祭りの意義の講演、馬松亭・王静斎・丁岐山・王世明<sup>(38)</sup>・張秉鐸<sup>(39)</sup>がクルアーンの読誦及び祈祷の挙行、最後に大殿内における参加者全体による集団礼拝といった手順で宗教儀礼を行った。

注目すべきは、この断食明けの祭りにおいてはムスリムを動員しての「抗日戦争」勝利の祈祷が祭りの内容に含まれていたことであった。ヒジュラ暦一三五七年からヒジュラ暦一三六三年（一九三八年から一九四四年）に実施された祭りでは、毎年「抗日戦争」勝利の早期実現を願うての祈祷が見られた。ヒジュラ暦一三五七年（一九三八年一月二四日或は二五日）の祭りでは「抗戦勝

利を祈祷する意義」なる一文が発表された。前述したヒジュラ暦一三五八年の祭りの事例でも、宗教儀礼と「抗日」に関する内容の両方が行われていた。またこの年の祭りの内容の中には国難に殉じたムスリム同胞（「同胞」や「抗戦」の過程での戦死者の追悼と前線で戦死した馬秉忠（国民党騎兵暫編第二師二旅旅長）というムスリムの烈士個人に対する追悼が組み込まれていた。ヒジュラ暦一三五九年の祭り（一九四〇年一月二日、十八梯清真寺）では、〈協会〉の理事であった王曾善や薛文波などをはじめ、重慶城内のムスリム三〇〇余名が参加して執り行われた。「抗日戦争」勝利を祈祷し、国難に殉じた同胞に対する追悼の儀式を挙行した。また〈協会〉はこの祭りの際に、「開斎節告同胞書」なる文書を二千部印刷し、重慶のムスリム及び各地の分会や支会に配布した。

ちなみにこの年には重慶十八梯清真寺での祭礼とは別に、〈協会〉の事務所でも唐副理事長や職員二〇余名によって祭りが祝われた。ここでも、参加者全員による集団礼拝を挙行するとともに、「抗日戦争」における最終的な勝利の早期実現を願うての祈祷、及び国難に殉じた同胞の追悼が行われた。

またヒジュラ暦一三六〇年の祭り（一九四一年一〇月二三日）では、林仲明と麦斯武徳<sup>(4)</sup>がクルアーンを誦し、唐副理事長や丁岐山アホンらが講話を行い、最後に参加者全体で集団礼拝を行うという形で行われた。五〇〇人以上が参加したが、各政府機関に勤務する知識人青年が特に多かった。ここでは祭りの宗教上の意義やムスリムに対してイスラームの宗教意識を発揚するといった宗教要素と「抗戦建国」に対するムスリムの貢献の必要性といった「抗日」の要素が同時に語られていた。さらに前線での戦死者と国難に殉じた同胞を追悼し、「抗日戦争」の最終的な勝利が早期に実現するように祈禱を執り行った。

ヒジュラ暦一三六一年の祭り（一九四二年、参加者五〇〇人余）でも、戦争の勝利の祈禱が実施されていた。ヒジュラ暦一三六二年の祭り（一九四三年一〇月二日、午後八時開始、十八梯清真寺で開催、参加者五〇〇人余）でも、宗教儀礼（礼拝の前に馬松亭による「臥爾祖」（ワーズ、説教）の実施、孫繩武常務理事による会務報告、集団礼拝及び共食（「聚食」）の挙行）や「抗日」に関する内容（礼拝後に連合国の「抗戦」勝利と戦死者追悼のための祈禱の実施）の両者が見られた。ヒジ

ュラ暦一三六三年の祭り（一九四四年九月二〇日、午後九時開始、十八梯清真寺）は、重慶在住の中国と外国の双方のムスリム男女六〇〇余名もの信徒が集まったため、祭礼会場であった清真寺の大殿に入りきれなかったため、会場を臨時に殿外にもひろげて祭礼を挙行了した。殿内では馬松亭が、殿外では定申明<sup>(42)</sup>がそれぞれ指導して集団礼拝を挙行了した。礼拝後には達浦生アホンが指導して「抗日戦争」の勝利及び国難に殉じた同胞のための祈禱を実施した。

ちなみに、礼拝を行う前に〈協会〉はエジプト国王からの中国ムスリムに対する「九・一八」（「満洲事変」）からの復興を祝福するという表示を受けたことを公表した。このように、宗教的な内容の中に抗日運動の要素が組み込まれ、両者は密接に結びつけられるようになったのである。

断食明けの祭りにおいては戦死者の追悼会の役割が加えられている点が重要である。前述した祭りの内容から、こうした追悼がヒジュラ暦一三五八年、ヒジュラ暦一三五年、ヒジュラ暦一三六〇年、ヒジュラ暦一三六二年、ヒジュラ暦一三六三年とほぼ毎年実施されたことがわかる。祭りの中に烈士の追悼会の要素を組み込むことで、

戦時下という状況の中で中国の同胞やムスリム同胞が犠牲になつている現状を知らしめ、彼らに実感させることによつて、「愛国心」や「抗日」、「抗戦」といった意識を奮立たせて、戦争を遂行していくためにムスリムを動員しやすくしようとしたと考えられる。〈協会〉が追悼会の要素を組み込むことによつて、こうした祭りが間接的に国民政府による戦争動員に寄与していたことがうかがえる。（表1参照）

### （三）重慶における犠牲祭

他方、イブラーヒームとイスマイールの故事に由来する犠牲祭に対して〈協会〉は「イスラームの儀礼によつて、イブラーヒームの教主（アッラー）に対する忠及びイスマイールの父イブラーヒームに対する孝を記念する」ものとし、さらに「国難は日に切迫し、忠孝を美德として提唱することが急務である。本会は各分支会に打電し、回民が期日までに確実に忠孝節を挙行し、忠孝奨励の一助となるようにする」と述べている。ここでは、戦時下で忠孝を美德として提唱することが急務であると強調し、それを推進するために犠牲祭を挙行することを推奨している。〈協会〉は本来の故事の持つ宗教信仰心

という点よりも、この故事の中から導き出される「忠孝」という点を力説した。それはまた「自分たち一般ムスリム同胞はただ宰牲（犠牲）を崇拜するという知識があるのみで、多くは忠孝の深い意味を理解せず、この精神の教訓は未だ十分に発揚できていないので、犠牲における忠孝の偉大なる意義を記念する必要性がある」ことを強調している。<sup>(4)</sup>

「忠孝」とは中国で儒教における実践上の二大徳目であるとするのが一般である。儒教では「忠」とは、自己及び他人に対して誠実を尽くすことであり、これが転じて国家や君主のために尽くす忠義という徳目とされた。「孝」とは、子の親に対する規範で敬愛の感情に基づく行為であり、本来親子間にとどまる考えが儀式化・宗教化され、広く社会一般にまで拡大された徳目であった。これは国家から家族に至るまでを規定する最優先の教えとして中国人に血肉化した中国における独自の概念であった。このように一般的に考えられている「忠孝」という概念にクルアーンの故事に基づく犠牲を置き換えている点が注目されよう。犠牲の故事の「主」への信仰心に対して「忠」という言葉を用い、父親に対する孝行に対して「孝」を用いている。信仰の篤さに由来する宗教的

なことを記念する祭りの犠牲を、「忠孝」という中国の伝統的な道徳観に基づく論理によって説明したのである。またこの解釈の中では犠牲祭を直接意味する「宰牲節」や「古爾邦節」といった呼称ではなく、故事が含有する内容からくる「忠孝節」という呼称を用いたのも興味深い。<sup>(45)</sup>この呼称は〈協会〉の会報の中でも頻繁に使われている。イスマイルとイブラーヒームの故事には父の「主」に対する忠と息子の父に対する孝が読み取れるので、そこから「アラビア語の原文による解釈だと『宰牲節』或いは『犠牲節』であるが、その実際に含んでいる意味に照らすのならば中国の倫理の名称を用いて解釈し『忠孝節』となる」と見なしていたところからも、犠牲祭が本来持つている犠牲の意味よりも忠孝を強調するためであったことがうかがえる。

これはイスラームの秩序観をすり替え、「忠孝」の概念を利用して中国ムスリム以外にもわかるように説明しようとしたものともいえよう。それは戦時下において漢回両者がともに一致団結して立ち向かわなければならぬ状況の中で、ムスリムが実践している宗教儀礼が漢族に理解できないような奇異なことではなく、漢族の価値観でも理解できるものとして説明する必要があったから

である。漢族には清末のムスリム反乱によって助長されたムスリムへの偏見や無理解がその後も根強く残っており、そうした雰囲気をもスリムの側も切実に痛感していた。時には偏見や無理解が漢回両者の対立にまで発展させてしまうという現状があった。こういうことも想定されるが、詳細について別途検討したい。

そうした中で、故事の持つ「主」であるアッラーへの信仰心の篤さを明らかにするための犠牲を国家への「忠」としての犠牲に置き換え、またイスマイルの父への「孝」をムスリムによる国家への「孝」に変化させた。その裏で戦時下での「主」に対する信仰心に由来する犠牲を国家に対する忠誠心からくる犠牲へと転換する際に、「国家が成り立たなければ、宗教が成り立たない」という論理を用いて、宗教の存続には国家が必要であるので、宗教のために国家へ貢献することが宗教に対する貢献であると説いたのである。<sup>(47)</sup>これは清末のムスリム反乱以来蔓延していた偏見・無理解や中国の中で絶対的なマイノリティとして生きなければならぬムスリムにとって取らざるをえない生存の術であった。このように〈協会〉の指導層を構成したムスリムたちの側も国民政府にすりよるための建前を内外に説いていた。

また「殉教」という概念も国家への犠牲という論理を補強するために利用された。聖戦であるジハードは神のために自己を犠牲にして戦うことをいい、それは信仰とウンマ<sup>(48)</sup>の防衛・拡大のために共同体に課された連帯的義務であり、健康な成人ムスリムがカリフまたはスルタンの指名によって従事するというものである。敵の侵略などに際して郷土を防衛するという個人の義務（フアルド<sup>(49)</sup>）によってジハードへの参加が生じる。ジハードでの戦死者は殉教者となり、その後彼らには樂園が約束されていると考えられている。この殉教をシャハーダと呼び、これは神の道における奮闘努力であるジハードにおいて、死して信仰を証明すること、クルアーンでは殉教者（シャヒード）はアッラーの祝福を受け、おおいなる褒美を与えられると述べられ、ハディース（ムハンマドの言行録）でも来世での至福が約束されていると言われている。イスラーム法学では、シャヒードはジハードでの戦死者とその他とに類別され、後者には礼拝中に死んだ者、信仰のゆえに殺された者、生涯をイスラームの教えに捧げた学者などが入り、病没・事故死であっても殉教者と称される。

日中戦争期の中国のムスリムもこの考え方に基づいて

「抗戦シャヒード論」と呼ばれる理論を有していた。クルアーンのジハードに関する章句を引用することで日本の侵攻に苦しむ中国の一員としてのムスリムの行動規範を、「イスラーム共同体」全体の反植民地闘争や反侵略戦争の枠組みの中で再確認することを意図していた。地上の国家間の戦争はアッラーの意思にかなう防衛のためのジハードとして受け止められていた。この犠牲者はシャヒードとして讃えられるという同時代のイスラーム復興の主流解釈が中国に導入され、中国の現実に照らし合わせて再構成された。背景には多くのムスリム同胞が戦争によって犠牲になつていくという現実があり、その解釈は中国のムスリムの中に浸透していた。このような状況下で、クルアーンを根拠とするジハードとそれによる殉教という概念が宗教と「抗戦」を結び役割を果すものであった<sup>(50)</sup>。

これらの概念によって「抗日」がジハードに置き換えられた。ジハードや殉教という概念を利用し、抗日運動を「イスラーム的」なものにすることにによって宗教と結びつけた。クルアーンの章句を根拠とすることで「抗戦」は聖戦となり、この戦争は宗教的に正しい行為となつた。

それでは、次に前述のように解釈されていたとされる犠牲祭を（協会）はいかに実施したのであろうか。断食明けの祭りと同様に、（協会）が犠牲祭を主催し、全国のみスリムを動員した。以下、重慶の犠牲祭について『中国回教救国協会会刊』、『新華日報』を使用して具体的に見ていく。<sup>(51)</sup>重慶においても犠牲祭は一九四〇年から一九四四年（ヒジュラ暦一三五八年から一三六三年）の間執り行われていた。その会場は主に十八梯清真寺であった。犠牲祭の内容は、礼拝の指導、犠牲祭の起源とその意義の説明、宗教精神の発揚、クルアーンの読誦、礼拝、喜捨の実施、みスリムを動員して「抗日戦争」勝利のための祈禱などであった。

ヒジュラ暦一三五八年の祭り（一九四〇年一月二一日、午後九時開始、十八梯清真寺で開催、参加者三〇〇人余り）では、張秉鐸アホンによる礼拝の指導や丁岐山アホンによるクルアーンの読誦といった宗教要素が見られた。王曾善常務理事による「忠孝節」の起源と「抗日戦争」時期にはみスリムが指導者に服従し、個人を犠牲にして国家に尽くすべきであることの意義を講義したとあるように、ここでも宗教儀礼と抗日運動という時局的要素の双方が含まれていた。また「抗日戦争」の最終的な勝利

及びトルコの大地震（一九三九年二月二六日のエルジンシャン地震）の被災者のための祈禱も執り行われた。ヒジュラ暦一三五九年の祭り（一九四一年一月一三日、午後九時開始、十八梯清真寺で開催）では、喜捨の実施、犠牲とムハンマドを追慕する意の表示、クルアーンの読誦、「忠孝節」と「抗戦建国」事業の関係の説明、国難に殉じた同胞及び「抗日戦争」の最終的な勝利を願うための祈禱といった内容が行われていた。ヒジュラ暦一三六〇年の祭り（一九四一年二月三〇日、十八梯清真寺、参加者の多くは知識人）では、唐副理事長及び孫常務理事が講話の中で「忠孝節」の意義及び正義の為の犠牲という宗教精神の発揚と「興教建国」の使命への努力の必要性を力説した。ヒジュラ暦一三六一年の祭り（一九四二年二月二〇日、百齡餐厅で開催、参加者三〇〇人余り、唐柯三、時子周両副理事長の出席）では、唐副理事長に「忠孝節」の解釈、丁岐山アホンによる意見の補足と礼拝儀礼の解説、「抗日戦争」勝利及び戦死者追悼のための集団礼拝の挙行が行われた。唐副理事長による解積の自身は「忠孝の二字が犠牲の意味であり、イスラームが忠孝の道徳の真理を提唱し、回民同胞はムハンマドの偉大な精神に習って愛国愛教に努めるべきである」と<sup>(52)</sup>



いうことであつた。また（協会）が国内と世界中のムスリム同胞に打電し、各同盟国の神聖な「抗日戦争」の勝利のための祈祷の実施を要請した。ヒジュラ暦一三六二年の祭り（一九四三年一月八日）では、犠牲祭を記念して七つの重要事項の実施を公布し執り行われた。それは、史実を述べて「忠孝」の「大徳」（普遍的な徳目）並びに「犠牲」の「大勇」（真の勇氣）を宣揚すること、犠牲の供犠と喜捨を確実に実行すること、メッカ巡礼の中身及びその意義を解説すること、巡礼経験者によるメッカ巡礼の実情の講演、「抗日戦争」勝利の祈祷の儀式を挙行すること、祭礼後に集団礼拝を挙行して団結して親愛を重ねあうこと、機会を設けて教外に教義を宣伝すること、重慶市の各大新聞が特集号及び宣伝小冊子を発行することであつた。ヒジュラ暦一三六三年の祭り（一九四四年一月二七日、一〇時—一二時、十八梯清真寺で開催、参加者六〇〇人余り）では、イラン駐華公使納塞爾（ナースイル）とその秘書官やトルコ大使館秘書歐斯曼（オスマン）といった外国の使節も祭礼に参加した。この祭礼を馬松亭が主宰し、納塞爾がクルアーンを誦読した。また納塞爾が中国の「抗日戦争」での勝利を願つて祈祷を行った。

犠牲祭の中でも断食明けの祭り同様に、国難に殉じたムスリム同胞や中国の同胞を追悼するための儀礼と「抗日戦争」勝利のための祈祷が執り行われた。前述のように、前者はヒジュラ暦一三五九年とヒジュラ暦一三六一年に、後者はほぼ毎年（ヒジュラ暦一三五八年、ヒジュラ暦一三五九年、ヒジュラ暦一三六一年、ヒジュラ暦一三六二、ヒジュラ暦一三六三年）に見られた。

ここで特に注目されるのは、宗教活動と抗日運動の二つの犠牲を結合しようとしていた点である。その事例は、前述のヒジュラ暦一三五八年の祭りの中の王會善による講義からも見られる。王常務理事は「忠孝節」の起源を述べて、「抗日戦争時期のムスリムは指導者に服従し、個人を犠牲にして国家に忠を尽さなければならぬ」とを説いた。またヒジュラ暦一三五九年の祭りの中でも「忠孝節」と「抗戦建国」事業の説明がなされたということが記されている。ヒジュラ暦一三六〇年の祭りの中での『忠孝節』の意義及び正義の為に犠牲になるといふ宗教精神の発揚をムスリムにし、興教建国の使命に対して努力することを勧める<sup>(3)</sup>ことを唐副理事長及び孫常務理事がそれぞれ説いた。このように戦時下の犠牲祭においてイスラームの犠牲による宗教精神と「抗

戦」の二つの発揚を結びつけて同時に語ったのである。

(表二参照)

以上のように、〈協会〉はイスラームに関する祭りを主催していたり、挙行の呼び掛けを行っていたりするなど宗教行事の開催に主導的立場にあった。そして、〈協会〉はこの立場を利用して抗日運動を宗教活動の中に組み込んでいった。戦争での戦死者の追悼といった「抗日」的要素や忠孝という中国の伝統的な秩序観をイスラームの宗教行事における儀礼の中に刷り込むことで「抗日」と宗教とを切り離すことができないようにしたのである。またイスラームの側から見れば抗日運動の側面を持つことで宗教活動を同時に行うことができたともいえる。

おわりに

筆者が本稿において焦点をあてた日中戦争期の重慶におけるイスラームの宗教活動の分析から得られた結論は次の通りである。

両イードの主催及び挙行の呼びかけは、国民政府に近い立場にあり、その指導下にあった〈協会〉によって実施されていた。それには宗教活動と抗日運動の二つの目的があり、宗教活動が抗日運動と結びついて、戦争動員

に役立つことが意図されていた。これは宗教儀礼を用いたイスラームの秩序観を忠孝という中国の伝統的秩序観へとすり替え、「愛国」を挿入して「抗日」へと向かわせる意識の操作を試みた一例だったといえる。〈協会〉は宗教活動の場である清真寺を間接的に管理することで宗教活動を主催し、それを通じて抗日運動をイスラームに浸透させたのであった。また協会の中で、国民政府に協力したイスラームにとって抗日運動の側面を持つという建前を用いることで宗教活動であったイードを実施できたといえるだろう。本稿で〈協会〉による清真寺の管理を通して実施した宗教活動を見てきたが、これは〈協会〉とそれを指導した国民政府の試みようとした或いは試みたかった政策のモデルである。重慶が従来在地のイスラームが少なく、国民政府とともに多数のイスラームが外部から流入し、彼らが主導権を握ることのできた特殊な地域であるという事情から、〈協会〉による実験的な試みを行うことができたと考えられる。国民政府と〈協会〉による宗教管理のモデルケースを提示した。重慶以外の地域で実際このモデルがどのように行われていたかは見ていく必要がある。

なお今後の課題として以下の点を挙げておく。本稿は

〈協会〉の主張の解明が中心であるため、今後さらなる複眼的な視点が必要であることは避けられない。本稿では中国のイスラームやムスリムといった括りでイスラームを扱っているため、教派や「民族」の差異には触れていない。この点も今後注意を払っていく必要があるが、さらに重慶市分会と清真寺との具体的な関係の実態の解明が必要である。〈協会〉の理念とその活動の実態は必ずしも一致していたとは限らないからである。以上の問題については稿を改めて検討したいと思う。

(表一覽)

(注) 表中の下線部…「内容(一) 宗教・儀礼」、「内容(二) 『抗戦』」の両方の項目の内容であるとみなせるもので、両者のどちらか一方であると明確に区別することができないものに対して下線部を引いて表示した。

表一 重慶における断食明けの祭り

(出典) 「回民開齋節祈祷抗戰勝利」(『中央日報』一九三八年一月二四日)。唐柯三「開齋節舉行祈祷大会在大殿演講」(『中国回教救国協會会刊』一卷三期、一九三九年) 五一―六頁。「發動開齋節祈祷大会」(『中国回教救国協會会刊』一卷三期、一九三九年) 二六頁。

協會会刊』一卷三期、一九三九年) 一四頁。「中国回教救国協會舉行開齋節祈祷大会宣言」(『中国回教救国協會会刊』一卷四期、一九三九年) 二頁。「全国回胞祈祷勝利並追悼馬秉忠旅長」(『中国回教救国協會会刊』一卷四期、一九三九年) 一六頁。「舉行開齋節日祈祷大会」(『中国回教救国協會会刊』一卷四期、一九三九年) 二六頁。「全国回胞於開齋節日祈祷抗戰勝利並追悼馬秉忠旅長—晋回民組織抗日義勇隊」(『中央日報』一九三九年一月一〇日)。「慶祝開齋節祈祷抗戰勝利」(『中国回教救国協會会刊』三卷一期、一九四〇年) 一三三頁。「簡訊」(『新華日報』一九四〇年一月二日)。「重慶回胞隆重慶祝開齋節」(『中国回教救国協會会刊』三卷一期、一九四一年) 一七頁。「市聞一束」(『新華日報』一九四二年一月一三日)。「開齋節祈祷勝利」(『中国回教救国協會会刊』五卷九—二二期合刊、一九三九年) 二八頁。「市聞一束」(『新華日報』一九四三年一月一日)。「陪都教胞熱烈慶祝開齋節」(『中国回教救国協會会刊』六卷一〇—二二期合刊、一九四四年) 一六頁。「市聞一束」(『新華日報』一九四四年九月一七日)。

日中戦争期の重慶における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴

七三（七三）

内容(1)宗教・儀礼	内容(2)「抗戦」
	「祈祷抗戦勝利的意義」という一文を発表。
<p>唐副理事長による断食明けの祭りの祈祷大会を挙げる意義の説明。艾宣裁による大会の順序の報告。丁岐山アホンによる礼拝儀礼の講釈。馬松亭の指導による礼拝。礼拝後の「呼徒白」(フトバ、金曜正午の集団礼拝や二大祭の礼拝に先立ってなされる説教)時に、馬松亭による「開齋節」の意義の講演。馬松亭・王静齋・丁岐山・王世明・張秉鐸によるクルアーンの読誦及び祈祷の挙行。最後に大殿内で全体による集団礼拝を挙行。一人一人が握手し、平安を祈る。</p>	<p>「抗日戦争」による戦死者と国難に殉じたムスリム同胞及び前線で戦死した馬秉忠に対する追悼。「抗日戦争」の最終的な勝利の早期実現を願っての祈祷。</p>
<p>〈協会〉は「開齋節告同胞書」を二千部印刷し、重慶のムスリム及び各地の分会や支会に配布。</p>	<p>「抗日戦争」勝利の祈祷、及び戦死者と国難に殉じた同胞の追悼の儀式を挙行。</p>
<p>参加者全体による集団礼拝の挙行。</p>	<p>最終的な「抗日戦争」の勝利の早期実現を祈祷、及び国難に殉じた同胞の追悼。</p>
<p>「開齋節」の意義及びムスリム同胞のイスラーム精神の発揚と「抗戦建国」への貢献の必要性を説明。林子敏・麦斯武徳によるクルアーンの読誦。最後に全体で集団礼拝し握手し平安を祈る。</p>	<p>唐副理事長・丁岐山・黄アホンによる講話。「開齋節」の意義及びムスリム同胞のイスラーム精神の発揚と「抗戦建国」への貢献の必要性を説明。前線での戦死者・国難に殉じた同胞の追悼。「抗日戦争」の最終的な勝利が早期に実現するように祈祷。</p>
	<p>「抗日戦争」勝利の祈祷のための実施。</p>
<p>礼拝の前に馬松亭による「臥爾祖」(ワーズ、説教)の実施。集団礼拝及び共食(「聚食」)の挙行。</p>	<p>孫繩武による会務報告。礼拝後に連合国の「抗戦」勝利と戦死者追悼のための祈祷を実施。</p>
<p>大殿に入りきれなかったため、臨時に殿外にも会場をひろげて班を設ける。殿内では馬松亭が指導し、殿外では定中明が指導しての礼拝の挙行。集団礼拝を挙行し、握手して平安を祈る。</p>	<p>礼拝後、達浦生アホンが指導して「抗戦」勝利及び戦死者・国難に殉じた同胞のための祈祷を実施。また、礼拝前に協会はエジプト国王からの中国ムスリムに対する「九・一八」の復興記念日を祝福する表示を受けたことを公表した。</p>

表1 重慶における断食明けの祭り

西暦 (年)	ヒジュラ 暦(年)	月日 (西暦)	時間	会場	参加者数	〈協会〉における祭りの 挙行
1938年	1357年	(11月24日 或は25日と 定める。)				〈協会〉は断食明けの祭りを11月24日或は25日と定めて「抗戦」勝利の祈禱を行う。
1939年	1358年	11月13日	午前9時 —11時	十八梯清 真寺	600人余り	〈協会〉は各省分会に祭りの日時を通知し、各清真寺に転送させる。また〈協会〉は重慶市ムスリムを動員して祈禱大会を挙行する。
1940年	1359年	11月2日 (農 暦10月 3日)		十八梯清 真寺	重慶城内の信徒 300人余り(理 事王曾善・薛文 波等も参加)	同上
同上	同上	同上		〈協会〉 事務所	唐副理事長及び 〈協会〉の各組 に勤務する職員 20人余り	〈協会〉によ祭りの挙行。重慶での祈禱大会の実施。全国のムスリムを動員し、「抗日戦争」勝利の祈禱を実施。教義及び「抗戦」の宣伝を実施。
1941年	1360年	10月23日			500人以上(各 機関に勤務する 知識人青年の参 加が特に多い)	〈協会〉による全重慶ムスリムを動員しての祭りの祭礼の挙行。
1942年	1361年			十八梯清 真寺	500人余り	〈協会〉による祭りの典 礼の挙行。
1943年	1362年	10月2日	午前8時 開始	十八梯清 真寺	男女合わせて 500人余り	〈協会〉による祭りの祈 禱大会の挙行。
1944年	1363年	9月20日	午前9時 開始	十八梯清 真寺	600人余り(重 慶にいる中国と 外国の両方のム スリム男女)	〈協会〉によるムスリム を動員しての祭りの挙行。

表二 重慶における犠牲祭

- 〔出典〕「重慶同胞舉行忠孝節典禮並為抗戰勝利祈禱」  
〔『中国回教救国協會会刊』一卷八期、一九四〇年〕三七頁。「慶祝忠孝節」〔『中国回教救国協會会刊』三卷三・四期合刊、一九四一年〕四八頁。「回教忠孝節將舉行啓典」〔中央社訊〕〔『新華日報』一九四一年一月一〇日〕。  
「忠孝節重慶同胞熱烈慶祝」〔『中国回教救国協會会刊』四卷一期、一九四二年〕二九頁。「忠孝節渝市盛典志略」〔『中国回教救国協會会刊』五卷一期、一九四三年〕一三頁。「發動各地擴大紀念古爾邦節」〔『中国回教救国協會会刊』五卷九—二二期合刊、一九四三年〕二八頁。「陪都教胞熱烈慶祝犧牲節」〔『中国回教救国協會会刊』六卷一〇—二二期合刊、一九四四年〕一六頁。

日中戦争期の重慶における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴

七七（七七）



内容(1)宗教・儀礼	内容(2)「抗戦」
張秉鐸アホンによる礼拝の指導。丁岐山アホンによるクルアーンの読誦。	<u>王曾善による「忠孝節」の起源、「抗日戦争」時期には中国ムスリムが指導者に服従し、個人を犠牲にして国家に尽くすべきであることの意義を講義。「抗日戦争」の最終的な勝利及びトルコの大地震の被災者のための祈祷。</u>
<u>喜捨の実施。犠牲とムハンマドを迫害する意志の表示。</u> クルアーンの読誦。	「忠孝節」と「抗戦建国」事業の関係の説明。 <u>戦死者・国難に殉じた同胞及び「抗日戦争」における最終的な勝利の祈祷。</u>
唐副理事長による「忠孝節」の解釈。丁岐山アホンによる意見の補足と礼拝儀礼の解説。	礼拝後、「抗日戦争」勝利及び戦死者追悼のための集団礼拝を挙行し、お互いに握手して平安を祈る。〈協会〉による国内及び世界中のムスリム同胞に打電し、正義と各同盟国の神聖な「抗日戦争」の勝利のための祈祷の実施を要請。
犠牲祭を記念して七つの要点を公布（i. 史実を述べて忠孝の「大徳」並びに犠牲の「大勇」の宣揚， ii. 犠牲の供犠と喜捨の確実な実行， iii. メッカ巡礼の中身及びその意義の解説， iv. 巡礼経験者によるメッカ巡礼の実情の講演， v. 「抗日戦争」勝利の祈祷儀式を挙行， vi. 会礼後に集団礼拝を挙行し，団結して親愛を重ねること， vii. 機会を設けて教外に対して教義の宣伝），重慶市の各大新聞は特集号及び宣伝小冊子を発行すること。	
馬松亭による主宰。納塞爾によるクルアーンの読誦。	イラン駐華公使納塞爾とその秘書兼及びトルコ大使館秘書歐斯曼の3氏が講演。納塞爾による中国の「抗日戦争」勝利のための祈祷の実施。

表2 重慶における犠牲祭

西暦 (年)	ヒジュラ 暦(年)	月日 (西暦)	時間	会場	参加者数	〈協会〉における祭りの挙行
1940年	1358年	1月21日	午前9時 開始	十八梯清 真寺	300人余り	〈協会〉による祭りの挙行。
1941年	1359年	1月13日	午前9時 開始	十八梯清 真寺		〈協会〉による全国のムスリム に対する犠牲祭の日時の通知と 祭りの挙行。重慶市の信徒を集 めて盛典を挙行。
1941年	1360年	12月30日		十八梯清 真寺	(多くは知識人)	祭りの挙行。
1942年	1361年	12月20日		百齡餐厅	300人余り(唐・ 時両副理事長出席)	祭礼の挙行。
1943年	1362年	11月8日				〈協会〉による記念の典礼を拡 大しての挙行の実施し、各地の 教胞を動員して遵守させた。
1944年	1363年	11月27日	10時—12 時	十八梯清 真寺	600人余り(イラ ン駐華公使納塞 爾(ナースイル) とその秘書賽阿 本爾, トルコ大 使館秘書歐斯曼 (オスマン)も祭 礼に参加)	犠牲祭を記念しての祭礼を挙行。

註

- (1) 日本占領下の蒙疆や華北における日本側からの中国ムスリムへの働きかけについて、小村不二男『日本イスラーム史』（日本イスラーム友好連盟、一九八八年）、坂本勉「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」（坂本勉編著『日中戦争とイスラーム―滿蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶應義塾大学出版会、二〇〇八年）、新保敦子「日中戦争時期における日本と中国イスラーム教徒―中国回教総聯合会を中心として」（『アジア教育史研究』七号、一九九八年）、同「西北回教聯合会におけるイスラーム工作と教育」（『早稲田大学教育学部 学術研究（教育・社会教育学・体育学編）』四八号、一九九九年）、同「蒙疆政権におけるイスラーム教徒工作と教育―善隣回民女塾を中心として」（『中国研究所月報』五三巻五号、一九九九年）、同「日本占領下の華北におけるイスラーム青年工作―中国回教青年団をめぐって」（『早稲田教育評論』一四巻一号、二〇〇〇年）、同「日本軍占領下における宗教政策―中国華北のイスラーム教徒をめぐって」（『早稲田大学教育学部 学術研究（教育・社会教育学編）』五二号、二〇〇三年）、Ando Junichiro "Japan's 'Hui-Muslim Campaigns' (回民工作) in China from the 1910's to 1945-An Introductory Survey", *Annals of Japan Association for Middle East Studies* (日本中東学会) no. 18-2 などを参照。
- (2) 「中国回教救国協会章程」第二条（『中国回教救国協会 第一屆全体会代表大會特刊』一九三九年八月）二五
- (3) 賈廷詩他『白崇禧先生訪問紀録』（中央研究院近代史研究所口述歷史叢書四）（台北・中央研究院近代史研究所、一九八四年）五七三―五七四頁。
- (4) 「白理專長第一次大會致詞―『回教』與『回族』之区分」（『中国回教救国協会第一屆全体会代表大會特刊』）一〇頁。前掲『白崇禧先生訪問紀録』五七六―五七七頁。
- (5) 日中戦争期の中国ムスリムやその団体を扱った研究には以下のようなものがある。（協会）の総会については、答振益「中国回民救国協会成立時間地点質疑」（『回族研究』一九九一年二期）、白友涛・柴静「中国回教救国協会述論」（『回族研究』一九九五年四期）、答振益「関于中国回教救国協会成立の歴史背景」（『青海民族学院学报（社会科学版）』一九九七年四期）、答振益・劉書英「試析中国回教救国協会」（『回族研究』一九九八年四期）、松本ますみ「中国のイスラーム新文化運動―ムスリム・マイノリティの生き残り戦略」（小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、二〇〇三年）がある。また分会については、白友涛「中国回教救国協会安徽分会述評」（『回族研究』一九九九年二期）、孫穎慧「中国回教救国協会分会概述」（『寧夏社会科学』二〇〇五年四期）、同「中国回教救国協会寧夏分会述評」（『回族研究』二〇〇五年四期）がある。「協会」の理事長白崇禧とイスラームの関係については、常啓明「白崇禧將軍与桂林伊斯蘭教片断」（『回族研究』一九九六年二期）、同「白崇禧的教門情結」（『中国穆斯林』二〇〇三年二期）、周瑞

海「白崇禧將軍対日的貢獻」為紀念中国人民抗日闘争六十周年而作」〔回族研究〕二〇〇五年三期)、同「国民党中回族官兵対抗日的貢獻」二、国民党抗日回族將領白崇禧」(周瑞海他「中国回族抗日救亡史稿」北京・社会科学文献出版社、二〇〇六年)がある。また日中戦争における回民の「抗日」貢獻關係の研究には、桂林回民の「愛国救国」運動を扱った馮力行・唐国英「抗日戦争期間桂林回教界の愛国救亡運動」〔桂林市教育学院学报〕一九九九年二期)、民国期の回民社会団体を扱った白友涛・柴静「論民国時期回族社会的特点」〔回族研究〕二〇〇〇年二期)、日中戦争期の回民の対外活動を扱った達慧中「抗戦時期回族爭取國際声援的國民外交活動」〔西北第二民族学院学报〕二〇〇四年一期)、日中戦争における回民の「抗日」貢獻を扱った李松茂「中国穆斯林の抗日活動」〔中国宗教〕一九九五年二期)、薩利哈・安士偉「紀念世界反法西斯戦争和中国抗日戦争勝利五十周年」〔中国穆斯林〕(一九九五年五期)、麻健敏「回族全面投身抗戦及其歷史意義」〔福建論壇 人文社会科学版、一九九五年四期)、王伏平・鮑琳娜「西北回族対抗日戦争的貢獻」〔回族研究〕二〇〇三年四期)がある。中国ムスリムの宗教活動については、現在台湾で「協会」を引き継いだ中国回教協会による祭り(マウリド)を扱った木村自「移民と文化受容…台湾回民社会における聖紀祭礼の変遷と回民アイデンティティ」〔年報人間科学〕二四号第一分冊、二〇〇三年)、同「モスクの危機と回民アイデンティティ」在台湾中国系ムスリムのエスニシティと宗

日中戦争期の重慶における中国ムスリム団体の宗教活動とその特徴

教」〔年報人間科学〕二五号、二〇〇四年)がある。回民のアイデンティティと中国ナショナルイズムの關係を、政治運動・組織と宣伝を通して分析した研究には、安藤潤一郎「回教」アイデンティティと中国国家―一九三一年における「教案」の事例から」〔史学雑誌〕一〇五編一二号、一九九六年)がある。

(6) ただし、松本ますみ氏は中国イスラーム新文化運動の進展・機能、その現代につながる影響について論じた研究の中で、ムスリムの団体には「抗日」の側面以外にもそれ以前の中国イスラーム新文化運動との連続性が存在していたことを述べている(松本前掲論文)。

(7) 王朝によるものは、妹尾達彦「帝国の宇宙論―中華帝国の祭典儀礼」(水林彪・金子修一・渡辺節夫編『王権のコスモロジー』「比較歴史学大系」一) 弘文堂、一九九八年)を参照。また共産党によるものは丸田孝志の一連の研究、すなわち「陝甘寧辺区の記念日活動と新暦・農曆の時間」〔史学研究〕一二二号、一九九八年)、華北傀儡政権における記念日活動と民俗利用「山西省を中心に」(曾田三郎編『近代中国と日本 提携と敵対の半世紀』御茶の水書房、二〇〇一年)、抗日戦争期・内戦期における中国共産党根拠地の象徴「国旗と指導者像」〔アジア研究〕五〇巻三号、二〇〇四年)、「時と権力―中国共産党根拠地の記念日活動と新暦・農曆の時間」(一)(二)〔社会システム研究〕一〇号、一一号、二〇〇五年)、「大行・太岳根拠地の追悼のセレモニーと土地改革期の民俗」〔近きに在りて〕四九号、二〇〇六年)

などを参照。

- (8) 石島紀之・久保亨編『重慶国民政府史の研究』(東京大学出版会、二〇〇四年)四一九頁、石島紀之『雲南と近代中国——周辺』の視点から(青木書店、二〇〇四年)二二二頁。
- (9) 前掲『重慶国民政府史の研究』一一二頁、一〇頁。
- (10) 前掲『重慶国民政府史の研究』五一―五二頁。田中重光『近代・中国の都市と建築』(相模書房二〇〇五年)二六五頁。陳瀛濤主編『近代重慶城市史』(成都・四川大学出版社、一九九一年)二五八―二七〇頁。
- (11) 前掲『重慶国民政府史の研究』一一二頁、四―五頁、九―一〇頁。石島前掲書三三三頁。「国民政府移駐重慶宣言」[一九三七年一月二〇日]、「国民政府為改重慶市為直隸市給行政院訓令」[一九三九年五月五日]、「国民政府明定重慶為陪都令」[一九四〇年九月六日](以上、重慶市地方志編纂委員会『重慶市志』第二卷、重慶・西南師範大学出版社、二〇〇四年)三四―三四三頁。
- (12) 潜『重慶市回教概述』(『中国回教救国協会会刊』一卷五期、一九三九年)一五一―一六頁。
- (13) 伍儀彰『重慶回教源流考(節録)』(李興華・馮今源編『中国伊斯蘭教史参考資料選編』(一九一一―一九四九)銀川・寧夏人民出版社、一九八五年)一六七―一九九頁[原載『回教言論半月刊』一卷一〇号、一九三九年]。
- (14) ムスリム知識人の移動は例えば以下の通りである。馬松亭は一九四二年に桂林から重慶へ、唐柯三は一九三八年に武漢經由でその年の秋に桂林へ行き、その後一九三九年重慶へ遷った。また達浦生は上海から一九三八年に平涼へ、その後一九四一年重慶へ、宝鷄に移動した。イスラーム系師範学校の移転についても以下の通りである。成達師範学校は一九三七年に桂林へ、上海伊斯蘭師範学校は一九三八年に甘肅平涼に移転し平涼伊斯蘭師範学校と改め、一九四一年国立隴東師範に更に改名した。西北公学(中学)は一九三七年蘭州(蘭州西北中学)と成都(成都西北中学)に両分校を設置した。
- (15) 中国回教俱進会とは、一九二二年七月王寛が北平で設立した全国規模の社会団体である。本部は西单清真寺にあった。
- (16) 前掲『重慶市志』第二卷、二〇―二二頁。
- (17) 同上。
- (18) 『中国回教救国協会宣言』(『新華日報』一九三八年一月二六日)四面。『中国回教救国協会第二届監事名單』(一九三九年八月)、『中国回教救国協会第一届全体会代表大会特刊』三九頁。
- (19) 前掲『重慶市志』第二卷、二〇―二二頁。
- (20) 『中国回教救国協会一年來工作报告』(『中国回教救国協会第一届全体会代表大会特刊』)一九―二〇頁。
- (21) 重慶市渝中区人民政府地方志編纂委員会編『重慶市市中区志』(重慶・重慶出版社、一九九七年)七二二頁。
- (22) 『中国回教救国協会各分支会組織章程』(『月華』一〇卷三期―二期合刊、一九三八年)一六頁。「中国回教救国協会各地方分会支会区会組織通則」(『中国回教救国協会第一届全体会代表大会特刊』)二七―二九頁。「中国

回教救国協会分支部会組織通則」(『中国回教救国協会会刊』四卷五期—八期合刊、一九四二年)二四—二七頁。  
「補充支区会組織要点」(『中国回教救国協会会刊』一卷九期、一九四〇年)二六—二七頁。

(23) 伍儀彰前掲「重慶回教源流考」(『中国伊斯兰教史參考資料選編』一六七六—一六七九頁。前掲「重慶市志」第二卷、二〇—二二頁、また前掲「重慶市中区志」九二—九三頁及び七二〇頁)。

(24) 「清真寺管理法及寺董会組織條例公佈施行」(『中国回教救国協会会刊』三卷七期、一九四一年)、二〇頁。

(25) 岩村忍「中国回教社会の構造」下巻(『日本評論社、一九五〇年)四—四三頁。

(26) 「清真寺董事会組織通則」(民国二十九年二月一日第三次常会通過)、「清真寺管理辦法」、「推行清真寺管理辦法及清真寺董事会組織通則應注意事項」以上、「月華」一三卷四—九期合刊、一九四一年、二〇—二三頁。前掲「清真寺管理法及寺董会組織條例公佈施行」(『中国回教救国協会会刊』三卷七期)二〇頁。「修訂清真寺管理辦法」、「中国回教協會清真寺管理暫行辦法」、「清真寺董事会組織通則」、「推行清真寺管理辦法及清真寺董事会組織通則應注意事項」、以上「中国回教救国協会会刊」七卷八一—二期合刊、一九四八年、一一—一二頁。

(27) 岩村忍「中国回教社会の構造」(上・下)(『社会構成史体系五・六』日本評論社、一九四九—一九五〇年)。澤井充生「中国の宗教政策と回族の清真寺管理運営制度—寧夏回族自治区銀川市の事例から—」(『イスラム世

界』五九号、二〇〇二年八月)二三—四九頁。

(28) 潜「重慶市回教概述」(『中国回教救国協会会刊』一卷五期、一九三九年)一五—一六頁。「補修重慶西寺」および「紛紛電慰重慶西南兩寺之被炸」(『中国回教救国協会会刊』二卷八—九期合刊、一九四〇年)二四—二五頁。「本会城址暨陪都清真寺被炸」(『中国回教救国協会会刊』三卷一〇期、一九四一年)二〇頁。「修建重慶清真西寺」(『中国回教救国協会会刊』三卷一一—二期合刊、一九四一年)二〇頁。伍儀彰前掲「重慶回教源流考」(『中国伊斯兰教史參考資料選編』一六七六—一六七九頁。馬以愚「中国回教名禮拜寺記・重慶清真寺」(『中国伊斯兰教史參考資料選編』三九五—四〇八頁「原載『東方雜誌』四二卷三号、一九四六年)。「修建陪都清真大寺」(『月華』一四卷九—一〇期、一九四二年)一三頁。温少鶴「重慶清真寺史実簡述」(『月華』一六卷一—三期、一九四六年)一三頁。前掲「重慶市志」第二卷、八九—九一頁。

四川省地方志編纂委員會編「四川省志・宗教志」成都・四川人民出版社、一九九八年、二三六—二四二頁を参照。  
(29) 王夢揚(一九〇五—一九八九)は本名を孟揚、筆名を夢揚といった。北京出身の回民であり、成達師範学校、西北中学で教員を務め、「月華報」の主編を兼ねた。日中戦争期には「協会」の理事を務めた。一九四〇年以降、前後して隴東師範学校、新疆学院文学系などで活動した。その後、新疆维吾尔自治区書法家協会理事、新疆宗教协会常務委員、新疆维吾尔自治区文史館館員、中国書法家协会會員などを歴任した。楊惠雲主編「中国回族大辞

- 典』(上海・上海辞書出版社、一九九三年)二〇六頁参照。
- (30) 前掲「補修重慶西寺」(『中国回教救国協会会刊』二巻八・九期合刊)一四頁。
- (31) 前掲「修建重慶清真西寺」(『中国回教救国協会会刊』三巻一・二期合刊)二〇頁。
- (32) 前掲「重慶市志」第二巻、八九―九〇頁。
- (33) 木村前掲論文、五一頁および五四頁。
- (34) この供儀の出典はクルアーン三七章一〇二―一〇八節である(「この子が」彼(イブラヒーム)引用者)と共に働く年頃になった時、彼は言った。『息子よ、私はあなたを犠牲に捧げる夢を見ました。さあ、あなたはどうか考えるのですか。』彼(イスマイル)は「答えて」言った。『父よ、あなたが命じられたようにして下さい。もしアッラーが御望みならば、私が耐え忍ぶことが御解かりでしょう。』そこで彼ら兩人は「命令に」服して、彼(子供)が額を「地に付け」うつ伏せになった時、我(アッラー)は告げた。『イブラヒームよ。あなたは確かにあの夢を實踐した。本当に我はこのように正しい行いをする者に報いる。これは明らかに試みであった。』我は大きな犠牲で彼を贖い、末永く彼のために(この祝福を)留めた。(三田了一訳・注解『日亜対訳 聖クルアーン』(改訂版第五刷)宗教法人日本ムスリム協会、一九九六年(カイロ版(標準エジプト版、カイロ・アズハル版)を利用了した日本語訳)。
- (35) 一九三九年の断食明けに關して「中国回教救国協会挙行開齋節祈禱大会宣言」(『中国回教救国協会会刊』一卷四期、一九三九年、二頁)という記事がある。また、会報には断食月に関して「一三五九年齋月中国回教救国協会告全国同胞書」(『中国回教救国協会会刊』二巻一二期、一九四〇年)という文章もある。これは一九四〇年一〇月のラマダーン(ヒジュラ暦の第九番目の月名であり、一か月間のサウムすなわち断食・齋戒が課せられた月。ラマダーン月の断食はムスリムに課せられた五行の義務行為である)に際して、協会が全国のムスリムに向けて發した宣伝文である。
- (36) 「回民開齋節祈禱抗戰勝利」(『中央日報』一九三八年一月二四日)。唐柯三「開齋節舉行祈禱大会在大殿演講」(『中国回教救国協会会刊』一卷三期、一九三九年)五一―六頁。「發動開齋節祈禱大会」(『中国回教救国協会会刊』一卷三期、一九三九年)一四頁。前掲「中国回教救国協会舉行開齋節祈禱大会宣言」(『中国回教救国協会会刊』一卷四期)二頁。「全国同胞祈禱勝利並追悼馬秉忠旅長」(『中国回教救国協会会刊』一卷四期、一九三九年)二六頁。「舉行開齋節日祈禱大会」(『中国回教救国協会会刊』一卷四期、一九三九年)二六頁。「全国同胞於開齋節日祈禱抗戰勝利並追悼馬秉忠旅長」(『中国回教救国協会会刊』一卷四期、一九三九年)一〇日。「慶祝開齋節祈禱抗戰勝利」(『中国回教救国協会会刊』三巻一期、一九四〇年)二三頁。「簡訊」(『新華日報』一九四〇年一月二日)。「重慶同胞隆重慶祝開齋節」(『中国回教救国協会会刊』三巻一期、一九四一年)一七頁。「市開一束」(『新華日報』一九四二年一月三日)。「開齋節祈

棒勝利」〔中国回教救国協会会刊〕五卷九—一二期合刊、一九三九年、二八頁。「市聞一束」〔新華日報〕一九四三年一月一日。「陪都教胞熱烈慶祝開齋節」〔中国回教救国協会会刊〕六卷一〇—一二期合刊、一九四四年一月六頁。「市聞一束」〔新華日報〕一九四四年九月十七日。

(37) 艾宣裁は、一九四二年八月改選で「協会」理事に選出された人物であった〔大会開幕階段〕及び「第三次会議記録」〔中国回教救国協会会刊〕四卷四期、三—五頁、一〇頁、一九頁。

(38) 王世明は、一九三二年に北平成達師範学校からエジプト・アズハル大学に第二次中国留学生派遣団として派遣された留学経験者であり、一九三八年に「協会」によって西アジア・南アジア地域に派遣された中国回教近東訪問団の構成員の一人であった〔趙振武「三十年來之中国回教文化概況」〕〔禹貢（半月刊）〕第五卷第一期、北平・禹貢学会、一九三六年、一八一—一九頁。閃克行「抗戰四年來的回教」〔中国回教救国協会会刊〕三卷九期、一九四一年、五頁。

(39) 張乘鐸は、一九三二年に北平成達師範学校からエジプト・アズハル大学に第二次中国留学生派遣団として派遣された人物であった〔趙振武前掲「三十年來之中国回教文化概況」〕〔禹貢（半月刊）〕一八一—一九頁。

(40) 林仲明は、字を子敏といい、雲南蒙自出身の回民であった。一九三二—一九四〇年、アズハル大学文學院に留学した。後に、北京外語學院教授になり、退職後に昆明伊蘭經學院教授を務める〔姚繼德「回族留學生与雲南

現代伊斯蘭文化」〕〔回族研究〕一九九六年第三期、一八頁参照。

(41) 麦斯武德（一八八六—一九五二）とは、新疆伊寧出身のウイグル族で圖冉学校、德爾乃克学校、伊犁学校等を創建するなど文教事業や社会事業などに尽力した人物であった。一九三五年一月新疆省代表の身分で、中国国民党第五次全国代表大会に参加し、中央執行委員に当選した。一九三七年、国民政府に随って、武漢、重慶へと遷った。一九三八年第一次国民参政会参政員、一九四〇年第二次国民参政会参政員、一九四三年国民政府委員、一九四五年国民党第六次中央執行委員、常務委員、一九四六年監察院新疆区監察使を歴任した。一九四七年五月新疆省政府委員兼主席に任ぜられ、七月国民大会代表立法委員新疆省選舉事務所主席委員に派遣され、九月監察院監察委員新疆省選舉監督に任ぜられた。一九四八年一月、新疆省政府委員兼主席を免職させられた。一九五一年逮捕され、その後死去した〔徐友春主編「民国人物大辞典」石家莊・河北人民出版社、一九九一年、八一—七頁参照〕。

(42) 定中明は湖南常德出身のムスリムである。上海伊蘭回文師範学校で学び、一九三四年アズハル大学に留学し、博士号を取得した。一九四二年に湖南常德に戻った後、国民政府外交部に就職した。後に台湾に行き、世界伊蘭教聯盟理事會理事、台湾国民党外交部顧問、台北市清教授兼阿拉伯文系主任、台湾伊蘭教總教長、台北市清真大寺伊瑪目を歴任した。たびたび台湾伊蘭教朝覲団



を率いてサウジアラビアへメッカ巡礼に赴いた(前掲『中国回族大辞典』七三六―七三七頁参照)。

(43) 「中国回教救国協会一年來工作報告(五、關於教務部分・甲、提倡忠孝節)」(『中国回教救国協会第一屆全体會員代表大會特刊』一九一―二〇頁)。

(44) 克「紀念偉大的忠孝節」(『中国回教救国協会會刊』三卷三・四期合刊、一九四一年) 八頁。

(45) 同上。

(46) 同上。

(47) 公務消息「二、理事長召集本會全體工作人員訓話」(『中国回教救国協会會刊』一卷一期、一九三九年) 二九頁。

(48) ウンマとは、宗教に立脚した共同体のことをいう。現代アラビア語では、民族共同体のことも指す。アラビア語の古典では、「ムハンマドの共同体」とも呼ばれているが、通例「イスラーム共同体」といい、世界中のムスリムを含むボーダーレスでグローバルなものと認識されている。

(49) イスラーム法上の義務には連帯義務(ファルド・キフアーヤ)と個人義務(ファルド・アイン)の区別がある。イスラーム共同体(ウンマ)の構成員のなかの一部がある義務を果たすことにより、共同体全体が当該の義務を果たしたことになる場合(例えばジハードへの参加)にはその義務は連帯義務と呼ばれる。これに対し、個々のムスリムのうち義務能力者がそれぞれ果たすべき義務を個人的義務(礼拝、断食等)という。なお、特殊な状況

において連帯義務が個人義務に転化する場合がある(例えば外敵侵入時の当該地域全員のジハード参加義務)。

(50) 前掲松本論文、一五八―一六一頁。

(51) 「重慶同胞舉行忠孝節典禮並為抗戰勝利祈禱」(『中国回教救国協会會刊』一卷八期、一九四〇年) 三七頁。「慶祝忠孝節」(『中国回教救国協会會刊』三卷三・四期合刊、一九四一年) 四八頁。「回教忠孝節將舉行啓典」(中央社訊)(『新華日報』一九四一年一月一〇日)。「忠孝節重慶同胞熱烈慶祝」(『中国回教救国協会會刊』四卷一期、一九四二年) 二九頁。「忠孝節渝市盛典志略」(『中国回教救国協会會刊』五卷一期、一九四三年) 一三頁。「發動各地擴大紀念古爾邦節」(『中国回教救国協会會刊』五卷九―一二期合刊、一九四三年) 二八頁。「陪都教胞熱烈慶祝犧牲節」(『中国回教救国協会會刊』六卷一〇―一二期合刊、一九四四年) 一六頁。

(52) 前掲「忠孝節重慶同胞熱烈慶祝」(『中国回教救国協会會刊』四卷一期) 二九頁。

(53) 前掲「慶祝忠孝節」(『中国回教救国協会會刊』三卷三・四期合刊) 四八頁。